様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６６６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５８０１０５

研究課題名（和文）Oxford & Cambridge Unionsの討論に見る英語の論述表現

研究課題名（英文）Use of the English Language for Argument and Debating as Found in Oxford & Cambridge Unions

研究代表者
崎村　耕二（Sakimura, Koji）

日本医科大学・医学部・教授

研究者番号：５０１６２３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：Cambridge Union Society の成立事情とこれまでの活動状況，討論のスタイルに関する基礎的情報を収集することができ，さらに実際のdebateへの参加および動画によって得られた多くの実例の分析により，英語論述表現の典型的様式を明らかにすることができた。英語だけでなく，日本の言語及び歴史・文化を比較の観点として設定し日英の修辞・文化等へのアプローチに新しい光を与えることができた。

研究成果の概要（英文）：The history of Cambridge Union Society, its activities, the style of debating have been outlined to provide basic sources of information and to establish the basis for the research. Then, findings about typical forms and styles in argumentative discourse in English, obtained from analyzing actual debates and videos, have been integrated into the attempt to approach European tradition of rhetoric and the Japanese ways of dealing with the use of language in debating.

研究分野：英語学

キーワード：修辞法　論理　討論　論証　ヨーロッパ文化

１．研究開始当初の背景

「ディスカッション」「ディベート」という記述が高等学校学習指導要領（外国語・英語）に現れるのは，平成元年度（平成６年４月施行）からであり，平成 21 年「指導要領解説」（文部科学省）で表記されるまで学校教育では重要な教育内容として取り扱われていなかった。日本の大学における弁論の訓練の場としての弁論部・弁論会は明治期からあったものの，英語による活動は，戦後設立された関連団体を含めてごく最近のものといってよい。国際化・グローバル人材の育成が国家的な施策として進められる一方で，学校における英語教育の非効率に関する危機意識が高まってきているが，現実の場面で生起する英語の諸問題，特に，英語による論理的表現技能の育成理論及び修辞的語法の研究は，あまりなされてこなかった。このような背景から，本研究は英語の論述表現の研究，特に，英語討論の本場である Oxford および Cambridge の両大学から何を学ぶことができるかを探求することとした。ここで討論と言うのは，日本でなじみのある debate competition における論証中心の競技的討論ではなく，しばしばヨーロッパ的な教養，ユーモアの感覚，学術的知識と多様な言語機能を駆使した union debate と呼ばれるものである。特にヨーロッパの弁論の伝統を引き継ぎながらも，自由な言論と独立した精神の獲得に情熱をもって取り組んできた Oxbridge の討論に限定する。

２．研究の目的

論理的思考力や批判的精神に基づく内容構成力を，言語表現の駆使力と一体のものとしてとらえ，伝統的な修辞表現のパターンと関連付けながら，英語の論述表現のパターンを探求することとした。ただ英語はヨーロッパの諸言語の中で，比較的新しい時期に大きな独自の発展を達成したことから，ヨーロッパ言語・文化の源流である古代ギリシャ・ローマの弁論・修辞を基礎とし，たえずこの文脈の中において考察を進めていくこととした。本研究の結果，英語という言語そのものの理解を深めるとともに，研究の応用としての言語教育に貢献するための知見を得ることを狙いとした。

３．研究の方法

方法は，次の４つによった。

（１）古代ギリシャ・ローマに始まる弁論・討論・修辞に関わる文献を収集し，基礎資料として参照した（その文献の一部は末尾文献リスト参照）。

（２）本研究の主な研究対象の一つである Cambridge Union Society と Oxford Union Society を訪問し，その活動状況について実地調査を計画し，実施した（President および運営委員等へのインタヴュー，討論への参加を含む。2013 年 8 月 14 日, Cambridge Union Society, 2016 年 1 月 12 日，Oxford Union Society, 2016 年 1 月 14 日, Cambridge Union Society,）。

（３）主にビデオ資料により討論の実例を調査する方法を取った。主に Oxford & Cambridge Union Debate における録画資料を調査し，スクリプトを起こすなどして論述・修辞表現の分析等を行った。主に次のスピーチを分析した。Richard Dawkins (“This House Believes Religion Has No Place In The 21st Century”, Cambridge), Craig Murray (“Don't Dream The American Dream”, Oxford Union), Alister McGrath (“Too Much Trust Is Placed in Science”, Oxford), Stephen Fry (“Classical Music Cannot Be Irrelevant To Today's Youth”, Cambridge).

（４）研究収束の時期に研究会を計画し，Cambridge Union Society の President および Debating Officer の講師招聘を準備した。この研究会は 2016 年 3 月 25 日に開催し，講師による講演・発表・模擬 debate 講習等を行った。またこの研究テーマと関連の深い参加者（日本英語交流連盟等）との意見交換を行った。

４．研究成果

≪様式論的考察≫

union debate の実例を調査し，修辞・論理表現の様式を考察した結果，次の事実を発見した。

（１）論者が動議（motion）に対する自己の態度を明確にしたのち，（反対意見の側の）聞き手を引き寄せるために外交的な意図をもった修辞と，見せかけによる「論点の反転」の試みが行われること。そして，論点の見かけ上の反転は，自己批評を含む批評精神の一つの現れであるとともに修辞表現の駆動力の発露であり，主張一辺倒の一般的な「ディベート」の硬直したイメージからはうかがえない自由闊達さを有している。討論における英語論述表現の研究は，単に言語技法や論証技術に終わるべきでなく，言語と理知の両方に関与するロゴスの精神をいつも視野に入れるべきであること。

（２）論題の論究に一貫性と統一性を与え，論理展開の進行を明確にするためのディスコース・マーカーの効果的使用が常套的にありうるものの，マーカーの使用が顕著に行われない見事な例もあること。（本研究では，I want to talk about … / first of all といった定番の論述表現の分類は行わなかった。）

（３）強勢をもって訴えかける修辞的表現も用いられる反面，弁論（特に主張）を押し付けがましくしないための言語的抑制が多くみられること。

≪言語的考察≫
次の２つのタイプに分類して英語の論述表現を考察した。
タイプⅠ　主張点や自己の立場を受け入れ易くし聞き手を引き入れるタイプ（論点の反転や，２つの相反する論点を同時に認知する等，精神の自由さと合わせて考察すべき項目）。
タイプⅡ　論点を押し出す，あるいは論点を強調し注意を促すタイプ（タイプⅠにおける「引き入れる，同意を喚起する」という効果に対して反対のベクトルを取る）
タイプⅢ　論理を単純に提示するタイプ（単純に論理の叙述のみに徹する［論理そのものを主張しない。］）

［Ⅰ］
（１）論題を取り扱う意義あるいは自己の立場の確認を行う----(I am not here to bury popular music, I am not here to dispraise…I have to … [Fry] / I am here tonight to say…[McGrath] / I'm not going to be talking about moral issues… I'm going to be talking as a scientist passionate about scientific truths. So I won't say I don't really care whether … but what I care about is …[Dawkins])
（２）適切な段階で自らの経験に言及する（Fry のプレゼンテーションに特徴的）。(my experience of classical music [Fry]) 適切な段階というのは，自己の経験の打ち出し方を誤ると押しつけがましくなり逆効果となる場合があるため。
（３）適切な段階で自らの情感を披露する。(I love the idea of dance [Fry]) ただし，上記⑵と同様，自己主張の印象をもたらすので，すぐに後述のような bathos のステップを取る。
（４）聞き手の心の中に一定の想念を抱かせる。(Think of …/ Imagine … / Fancy, fancy Mozart dying in the pauper's grave.[Fry] Many of us would say, "…" [McGrath] I think most of you know the kind of think I mean. [McGrath])
（５）２つの相反する論点を同時に認知する。(You can love two different things at once and not explode or be a hypocrite.[Fry]) ２つの矛盾する側面を持つ現実に目を開かせ，抽象的なあれかこれかの議論を乗り越える。
（６）聞き手が全般的に反感を抱くイメージを持ち出して否定するにあたり bathos の技法を使う。(Ladies and gentlemen, professors and deans, undergraduates, post graduates, pre-graduates, boys and girls, darlings and sordid media scum.) 文脈の流れに乗せて視点を絶妙に移すというユーモアの技法がみられる。
（７）対決する相手（論者）をあがめることで，敵対的なスタンスから自分をいったん外し，自分への一定の信頼を獲得する（Dubstep is my life.）これは，非難，冷やかし，皮肉等といった対決の作用よりも洗練された技法である(I'm not going to be rude about the second speaker for the proposition because he is an intellectual and I have no idea of what he said.[Murray])
（８）自分自身の価値を瞬間的に落とすことで聞き手を引き入れる。(I love the idea of dance. It so happens my legs were not equipped to be able to do it.[Fry]) 言語表現と内容の不釣り合いが醸し出すユーモア。
（９）取り扱っている話題の価値を突然落とすことで弛緩の効果を生み，視点を揺らす。(It's not necessary to dislike Americans. I only do it as a hobby. [Murray])
（１０）だれもが同意する見解をまず示し，それを前提としたもう一つの観点を導入する。一般的な同意事項の一つの側面を自己の論点に結び付けて，聞き手を引き入れる。(ここでは，聞き手のほとんどが少なくとも表面的には同意できる一般的な見解を利用して，論題の中に潜む難点を反駁し，自己の論点への賛意を喚起する，という技巧的な論述が行われる。) (The idea that every generation will have a standard of living better than the last. The idea that anybody can become president. Well, if you saw George W. Bush we all thought anybody can become president.[Murray] It is an important part, but it is only a part. [McGrath] There are other things we need to look at as well. [McGrath])
（１１）質問を投げかける。多くは修辞疑問文である。(例は多数。) (They don't deserve to hear that? [Fry] 肯定文を質問として投げかけている。)
（１２）対立する論者に完全な同意を表明する（ただし要点を限定する）。(He is absolutely right when he says … [McGrath])
（１３）対立する論者との対立点を認知し，その事実を承認する。(Richard Dawkins and I disagree on quite a few things, for example the question of God and the meaning of life [McGrath]) その上で，その事実を過小評価し，対立の距離を縮める(just to mention two small matters. [McGrath])。
（１４）論述をさらに進める旨を述べる（聞き手を導く効果がある）。(Let's take a stage further [McGrath]) または視点を自己の論点へ近づける。[肯定→否定]ではなくしばしば[否定→肯定]の構文推移。(It's not about …. It is … [Fry])
（１５）聞き手の理解の進度に言及し，こちら側に近づいていることを述べる(The point I'm going to make here---and I think you got it already---is …[McGrath])

［Ⅱ］

（1）強調表現（ディスコース・マーカーとして明示的に強調する）（I want to emphasize … / I want to say to you … McGrath]）
（2）反復技法（音声・フレーズ・文単位で多用。反復がもたらす効果および逆効果の可能性を視野に置く。）end rhyme: (These were not just samples and examples of what is purely and only for the elite.) / word: (It's snobbery, rack snobbery.) / phrase: Quite another thing. Quite another thing.) clause/sentence: (All that requires is that you listen, you actually listen.) (以上 Fry）しばしば否定表現の反復は，否定の強調作用を生む。(It is not necessary to … It is not necessary to … [Murray]）あるいは主張点を表す基調概念をことばをへん言い換えて何度も繰り返す（変奏あり）。(I love science, I am a lover of science [McGrath]）
（3）抑揚・強勢を用いる。(具体例省略)
（4）列挙する。(love, hope, triumph, and magnificence---and all these things [Fry]）
（5）他の論点を理念として取り上げたうえで，現実の事態への注目を喚起する。(The truth is … [Murray]）
（6）命令文を用いる。(Look at …/ Think about …[Dawkins]/ Think how … [Dawkins]) (Fancy … [Fry] 等も形式上は同様。）
（7）提案する。(Let's … [McGrath] 聞き手への提案の形をとっているが同意を促す作用が大きい。）

[III]
いわゆる理由，結果，帰結・結論，逆接，等を表す論理表現の使用は，予期したよりもはるかに少なかった。このこと自体，さらに考察の余地がある。注２で取り上げている同意・反対の表現も同様である。論理は，まず理知的な思考の展開として内容構成されるものであり，言語が論理そのものを成り立たせているものではない，という事実をまず認識すべきであろう。
[because] 調査したスピーチの例の中では，理由を挙げるための 接続詞 because の使用は少ないことが分かった。（きわめて論証的な McGrath のスピーチでは１回のみの使用であった。）
[仮定法を用いた推論]（we do not tell the full picture if we don't …[McGrath] given … [Dawkins]）
[助動詞を用いた推論] (it can be … / you could … / you may …)
[推論上の可能・不可能を述べる]（It is impossible to …)
[逆接を述べる]（but / however / although / nevertheless)
[無関係を述べる]（has nothing to do with …[Fry])
[説明・推論の無効を述べる]（You cannot resort to ... as an explanation of …)

《注 1》比喩（主にメタファー）は修辞法の最も重要な事項であり，アリストテレス（『詩学』）が唱えたように，二つのものの間にある新しい関係の発見という意味で着目すべきである。しかし，ホッブズなどの否定派によるメタファーの周辺的な位置づけに応じて，本研究では，「修辞=文学的効果」に対する「論述=理知的表現」を主な課題と位置付けた。しかしながら，用語の意味範囲の拡大がもたらす発見の効果（言語と意識の地平を広げる効果）は注目すべきものであり，実際，見事なメタファーの実例を多く指摘することができる。慎重な論者であれば，文学作品のようなメタファーの大掛かりな展開は避けるべきであろうが，論証そのものには影響を与えない範囲で論述の言語的展開を補佐する意図をもった多くの用例を見ることができた。A concerto … is an individual voice crying out and trying to make a statement of some kind and it's often drowned out by the orchestra and it fights back. And the orchestra fights back and it fights back. [Fry]。もっとも見事な実例は，I'm a wounded lover of science [McGrath]に見出すことができる。動議は短い文で提示され，当然ながら賛成・反対で応答が促されるため内容が単純化されている。I love science. という意見陳述で冒頭に論旨を明確に打ち出した論者が，微妙なあるいは複雑な観点を導入させようとすれば，メタファーで表現せざるを得ない，ということであろうか。限られた時間内で論旨を聴衆に理解させ同意を得なければならない状況では，言語の簡潔性（あるいは節約）が鍵であり，メタファーはもし効果的に用いられればこの必要に十分，答えてくれる（例: There is a round table at which science is an honored and welcome member. [McGrath]）。ただし，聞き手にもそれなりの教養が求められることから，union debate が成り立つ大前提として，膨大な知識の共有の上に相互理解を目指すことを可能にする文化的基盤がなければならないことが分かる。単なる議論の技法の問題ではないのである。（上記の例では，King Arthur のイメージが用いられているが論題は科学であることに注意。）(他に，Science is on a journey. ---等々，例は多数)
《注 2》反駁の表現は少なかったのでタイプとして設定しなかった。I disagree with … といった文部科学省「学習指導要領解説」等にも記載されている討論の定番表現が現実にどの頻度で使用されているかは，コーパスを利用した今後の研究により検証されるであろう。討論における対決のポジションは言語的な敵対表現を必ずしも必要としないのではないか。この疑問は，対立しながらも討論のプロセスが目指すのは真理の発見だ，という後述の理念にもつながる。

《注 3》説得あるいは誘導のためのいわゆる雄弁術の側面については，論述の中に含めなかった(例えば聴衆を持ち上げる表現：the finest university in the world. [Fry]).

≪文化的考察≫
高度な言語技能の駆使，歴史・文学等への allusion に満ちた内容構成，および人間性への洞察を含む英語表現は，Oxbridge ならではの豊かな教養を背景とする討論文化を作り上げていると考えられる。また，ヨーロッパの伝統的な発表様式 *inventio, dispositio, elaboratio* (*decoratio*) [以上ラテン語]の基本的な考えが伝統的大学の教育において浸透しており，これに科学的精神を基盤とした「証拠に基づく言説」が加わって，討論指導の基本的概念として教授される（Khan 氏によるワークショップ等のプレゼンテーションによる)。

また，Cambridge Union 訪問におけるスタッフ（会長含む）との意見交換において「討論におけるユーモアの重視」が話題となり，この観点で進めた考察は，スピーチの実例（前述）で明らかになった。また，Magpie and Stump Debating Society (Trinity College, Cambridge, 1866-1926)の記録により，討論の動議（motion）設定においてユーモアの要素が含まれていることが分かった（この課題は今後も調査の価値が十分にあると判断する。）例としては，The half is greater than the whole.（1/2 は１よりも大きい。）/ Black is white.(黒は白い。)を挙げることができる。これは単に冗談の効果を狙った phrasing という言語的な側面にとどまらず，論理・論証に対する精神的態度の表れとみることができ，本研究が視野とする言語的アプローチだけでは覆いきれない側面に光を当てる必要を示唆している。

≪比較文化史的考察≫
日英を比較する観点を設定し，まず，英国の歴史と討論の関係を考察した。暴力による対決の姿勢は歴史的に戦争を生み出してきたが，英国の場合，戦略的な言語使用が歴史の上で果たした役割は大きい。英国は，アングロサクソン人の大ブリテン島移住以降，デーン人の侵略に悩まされてきたが（アルフレッド大王の時代など)，外敵の侵入に対して交渉・契約という一定の戦略的アプローチをとった歴史的事実はデーンローの制定等にみられる通りであり，英国の言語・精神史を特徴づける要素として重要である。(敵方の語彙が英語の基本語彙として流入したことは，この期間の言語的状況の証拠となる。although，till，law　等のノルド語の存在。）ノルマン王朝による征服以後，古フランス語経由のラテン語系語彙の圧倒的な流入が英語の表現性を豊かなものにしたのちは，国家的な侵略の危機に陥ることはなかったが，長期にわたる英語の発展の歴史とともに英国人の中に戦略的言語使用の精神が根を下ろしたものと考えられる。対決を生みがちな論点を避けてものごとを曖昧にする，という日本社会に比較的多くみられる傾向とは異なり，英国人の対決のスタンスは，近代議会制民主主義の確立に寄与し，実態としての二大政党制そしてパーラメンタリー・ディベートと呼ばれる討論の様式を生み出した。

この関連で，議会場の空間的形式にみられる対決の構造に着目した。英国では議会場の空間的形式は「イギリス型」と呼ばれ，与野党の議席は対面している。他方，日本の議会場は半円形のいわゆる「ドイツ型」であり与野党が横に並んでいる。それとともに日本の議会運営は，委員会重視であり，議会場では対面して討論する形にはなっていない。対面型の英国議会では，対決のポジションを取るというそのことのために一定のルール（ある線を越えてはいけない，等）が厳しく設けられているのに対して，しばしば議会場での乱闘的な空間移動が発生する日本の未熟な政治状況は民主主義的討論の発達史という観点で興味深いものと言える。

このような事実に基づいて，英国人が生み出したパーラメンタリー・ディベートの様式を見てみると，論者同士が対決の姿勢をとりながらも，討議の進行の中で双方が発見へと導かれるような言語使用と思考活動が重んじられ，さらに会場からのコメントも受け入れる point of information という手続きと合わせて，共同作業的な要素が含まれることが分かる。

もちろん，以上のような体制は，制度を支える伝統・慣習そして訓練があってのことである。その背景には，言語そしてその効用を最大限に駆使して問題を解決しようとする熱意がある。

他方，日本語による弁論・討論は明治時代以降，主にイギリス等，当時の欧米の規範を移入したところから始まっており，そこから依然，（意識する無しにかかわらず）抜け出してはいないと考えられる。研究計画を進めるうえで，英語と比較した場合，日本語の使用法および論述の展開法に関して論者の間で共有されている言語・論理・論述・真理に関する基礎知識と教養の厚みが極めて乏しいことを認識した。union debate のエラスムス的な言語の多様性に対する意識，さらには弁論・論述と言語使用の抜き差しならぬ関係，また，理知による相互理解という民主主義社会の基盤を成す精神---このようなものに対する理解の未熟さは，日本文化に関する新しい研究課題として興味深いものであると認識した。

【当初の計画では予測できなかった副産物的な成果】当初の研究計画に入れていなかった次の事項について記載する。研究着手後，研究の進展の過程で，研究内容に含めるべきものとして認知した事項は，それ自体が（少

なくとも研究者にとって）意義ある発見であると考えられるためである。
（１）当初は視野に入れていなかったエラスムスの著作の意義を発見した(Copia: Foundations of the Abundant Style（1512）)。近代以降の英語の論述表現を研究する上で，ピーチャムとともに主要な調査対象とし，（今回は困難であったが）今後の計画に含めることとした。
（２）討論をめぐる日本の伝統的な言語観について一つの発見があった。特に言語使用の価値に対する過小評価についてである。一定の手続きを取った討論の様式は，「言挙げをしない」という価値評価が最初に見いだされた古代以降，歴史的な事件の中に多く見出すことができた。6 世紀中期の崇仏論争においては，欽明天皇が judge の役割を果たしたが，仏教の受容への賛成論が強かったにも関わらず採決は曖昧にされ，一時的な結果として混乱が起きた。鎌倉時代においては領地の境界争いが多かったという背景のもとで，源頼朝の立ち合いにより行われた久下直光と熊谷直実の対決の記録が残されている。口下手な直実が途中で癇癪を起し，退席したと伝えられている（『吾妻鏡』建元 3 年 10 月 25 日)。1579 年の安土宗論においては，織田信長の設定により審判者を置いて教義問答が行われたが，「A: お前は C を知っているか？ B: 知らない。A: それ見よ。お前の負けじゃ。」といったレベルの問答にとどまったばかりでなく，違反行為による一部の僧の処刑という結果をもたらした。その他，近現代における歴史的事件に係る討議の実例などを検討した結果，一方で，口頭による論述の形式は存在するものの，厳然として日本文化の中に「言挙げせず」「私の顔色で判断してほしい」「黙して行かん」「男は黙って・・・」といった態度が，言説様式の典型として存在することが分かった。ただし，従来の学問的知見は，「日本人は議論が下手である」あるいは「議論志向性」「言語的攻撃性」が他の国民に比べて低い，等の結論を引き出すにとどまっており，思想的には「議論が下手でもよい，それが美徳である」といった「開き直り」論まで現れている。英国にみられるような言語を駆使した討議の精神は，日本においては不活発なままなのであろうか，という疑問に対しては，国際的な文脈の中でその必要性が高まる中，Cambridge にみられる討論の伝統的精神と英語の論述表現を統合的に考察し，研究成果を教育の場面に応用するための今後の試みが待たれるところである。
(３)一部の修辞技法に関しては，理知に基づいた論述を妨げるものとして認知した。たとえば，オノマトペの使用である（「日本経済はガラガラと音をたてて崩れ去った」，等)。しかしこれは英語よりも日本語に顕著なものであるので，別途，取り扱うべきものだと判断した。

≪union debate の動画に関わる情報源≫
https://www.cus.org/
https://www.oxford-union.org/

≪主な参照文献リスト≫

Corbett, Edward P.J. *Classical Rhetoric for the Modern Student*. New York: Oxford UP, 1990.
Desiderius Erasmus of Rotterdam. *On Copia of Words and Ideas*. Trans. Donald King and David Rix. Milwaukee, WI: Marquette UP, 1963.
Enos, Theresa. Ed. *Encyclopedia of Rhetoric and Composition:* New York: Garland, 1996.
Parkinson, Stephen, *Arena of Ambition: The History of the Cambridge Union. London: Icon Books,* 2009.
クインティリアヌス,『弁論家の教育〈1～3〉』(西洋古典叢書)，京都大学学術出版会，2005，2009，2013.
中野 美香,『議論能力の熟達化プロセスに基づいた指導法の提案』，ナカニシヤ出版，2011.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）
崎村耕二,「英語をめぐる航海：アングロ・サクソンの言語と思考を探求する」査読無，10 巻 4 号，2014 年,196.
〔雑誌論文〕（計１件）
崎村耕二,「テクスト構成と重層のイメージ」査読有，11 巻 2 号，2015 年，110-114.
〔学会発表〕（計１件）
崎村耕二,「言挙げせぬ国の討論の歴史を考える」，学術英語研究会, 2016 年 3 月 25 日，日本獣医生命科学大学・日本医科大学合同教育棟（東京都武蔵野市）

〔その他〕
ホームページ等
http://language-and-thought.jp/

６．研究組織

(1)研究代表者
崎村耕二（Sakimura Koji）
日本医科大学　医学部教授
　研究者番号：50162326

(4)研究協力者
James Hutt
　President, Cambridge Union Society
Muhammad Asadullah Khan
　Debating Officer, Cambridge Union Society